

池田大作の「人間主義」と創価大学

勘 坂 純 市

アニョハセヨ

創価大学の創立者である池田大作先生は、1997年の趙永植先生との会見の折、慶熙大学は創価大学の「お兄さま」の大学であると述べました¹。本日は、「弟の大学」である創価大学を代表し、「お兄さま」の慶熙大学の宗教市民文化研究所が、韓国新宗教学会とともに主催される学術大会で話をさせていただくことを大変光栄に思います。

以下、学術報告ですので、人物の敬称は略させていただきます。

1. 創造的人間たれ

1997年の池田との会見で、趙は、「人間性が破壊されないように、何とか歴史の方向を転換しなければならない」と述べ、その方途として、趙の「人間中心主義」と池田の「人間主義」をあげました。趙は、この二つは同じ思想であるといいます²。

では、池田のいう「人間主義」とはなんでしょうか？ 本日は、とくに池田が創価大学に対して示した指針を主な手掛かりとして考えていきたいと思えます。

池田は、1973年の創価大学第3回入学式で、学生たちに「創造的人間たれ」と呼び掛けました。これは、現在に至るまで創価大学の重要な指針になっています。

もちろん、創造の作業は容易ではありません。池田は、「創造の仕事は高い山のようなものであり、……幅広い学問的知識と深みのある思索の基盤のうえに、はじめてみりのある創造の仕事ができる」と述べています。その「基盤」を築くために、大学はもっとも適切な場です。しかし残念ながら、当時の日本の大学は、「創造性への意欲は皆無に等しい」、とくに、「創造的人格

Junichi Kanzaka (創価大学経済学部)

この原稿は、2025年10月18日に、韓国新宗教学会と慶熙大学宗教市民文化研究所が主催し、韓国外国語大学で開催された「池田大作思想学術大会」で報告されたものである。この学術大会のテーマは、「池田大作思想と人類文明の転換——持続可能な平和と世界市民性を中心に」であり、韓国の学識者70人が出席した。

¹ 池田大作(2000)『21世紀と人生を語る』第1巻, 聖教新聞社, 248頁

² 池田大作(2000)『21世紀と人生を語る』第1巻, 聖教新聞社, 264, 267頁

を形成していく場」とはなっていませんでした³。そこで池田は、創価大学で、創造的人間を育成する真の大学の姿を、取り戻そうとしたのです。

また同じ講演で、池田は、学生たちに、「この創価大学を自分たちでつくり、自分たちで完成していく大学であるという認識をもっていただきたい」と呼びかけています。学生こそが、大学建設の主体者である。大学の中心は学生である。池田は、この指針を何度も創価大学で語っています。池田の「学生中心の大学」という指針は、日本の多くの大学の、教育より研究を重視する風潮に対する挑戦でした。日本の文部科学省が、「学生の立場に立った大学づくり」のために、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への視点の転換の必要性を強調したのは、2000年になってのことです⁴。これと比較すれば、池田の「学生中心」の大学論が先駆的意義をもっていたのは間違いありません。

しかし、池田の大学論の意義は、単に時代を先取りしていたことに留まりません。このことを理解するために、次に、池田の学問論、科学論について考察したいと思います。

2. 「急進主義的アプローチ」批判

平和学の父といわれるヨハン・ガルトゥングは、池田との対談で、25年かけてやっとたどり着いた自身の「基本的な洞察」を紹介しています。すなわち、「社会の現実はいかに複雑で矛盾に満ちており、数学のような一つの矛盾なき思想体系によって適切に表現することはできない」というのです。ガルトゥングは、世界を平和にする道筋を明らかにしてくれる理論を求めているのかもしれませんが、しかし、現実はいかに複雑で、そんな理論などできないと気付きました。池田は、この洞察に同意し、「抽象的な論理や概念は、あくまでも現実の“部分観”にすぎません」と答えています⁵。

こうした両者の学問観は、ジョン・デューイのプラグマティズムの思想と共通しているといえるでしょう。デューイは、「概念、理論、思想体系」は「道具」とであると指摘し、「すべての道具の場合と同じように、その価値は、それ自身のうちにあるのではなく、その使用の結果に現われる作業能力のうちにある」と述べています。概念、理論、思想体系は、決して完璧なものではない。それらは、「それらをテストする行動の基礎として理解すべきであって、究極的なものとして理解すべきではない」。むしろ、それらは、「使用されることを通じて常に発展し得るもの」なのです⁶。

デューイ協会元会長のヒックマンも、池田との対談で、「デューイの方法は、まず実際に経験したさまざまな困難に始まり、そこから安定を取り戻すのに必要な道具を適用することで達成さ

³ 池田大作（1973）「創造的人間たれ」『池田大作全集』59巻、41頁

⁴ 文部科学省（2000）「大学における学生生活の充実方策について」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm（2025年9月21日閲覧）

⁵ ヨハン・ガルトゥング、池田大作（1995）『平和への選択』毎日新聞社、75、77頁

⁶ ジョン・デューイ（[1920]1968）『哲学の改造』（清水幾太郎・清水禮子訳）岩波文庫、127-128頁

れる」と述べています⁷。

理論は「道具」に過ぎません。しかし、その理論を万能視して、それに合わせて「現実を裁断し、作り変えていこうとする」試みがしばしば行われてきました。1993年のアメリカ・クレアモント・マッケナ大学での講演⁸で、池田はこれを「急進主義的アプローチ」⁹と呼んで批判しています。それは、「歴史は一定の理論、法則によって導かれ、したがってその理論、法則さえマスターしてしまえば、すべてが分かったように錯覚してしまう」アプローチです。池田がとくに問題とするのは、こうしたアプローチが、「人間が自らの行動によって運命を切り開いていく力」を否定してしまうことです。

それは、目的の達成への過程を、ゴールに向かって歩みを進める道のりに例えてみるとわかりやすいかもしれません。ゴールに向かって歩いている自分を想像してください。そこで、あなたは問題に直面しました。あなたの前には幾筋かに分かれた道があり、間違っただ道をとれば目的地にはたどりつけません。でも、もしここに、それを「マスターしてしまえば、すべてが分る」包括的な「理論、法則」があるのなら、その理論が教えてくれた通りに正しい道を選ぶことができるのです。次に別の問題が起きても同じです。その理論はいつも正解を教えてください。そしてあなたは無事にゴールにたどり着くことができます。「急進主義的アプローチ」に多くの人が魅力を感じてしまうのは、理論にこうした力があると錯覚しているからです。

しかし、今あなたが歩んできた道のりを振り返って下さい。気が付くでしょうか。実は、あなたは、何も考えていないし、何も決断していません。ただ、理論にしたがって道を選んできただけです。あなたは、理論の駒にすぎません。池田が、「急進主義的アプローチ」では、「人間が自らの行動によって運命を切り開いていく力を否定されてしまう」というのは、このことをいっています。

また池田は、モスクワ大学総長のサドーヴニチイとの対談で、「もし、かりに科学の予測機能が完璧なものとなり、未来が100パーセント予測可能になったとすれば、それは、動物の未来と本質的に同じ」であるといっています。すなわち、『法則』や『決定論』にこだわって自由や責任に背を向けることは、未来を拒否することにほかならず、その結果、……人間であること自体の否定にまで行きついてしま[う]」のです¹⁰。

3. 理論を使いこなす知恵を

これに対し、池田は、「人間が自らの行動によって運命を切り開いていく力」を開発することから出発しようとします。困難な状況でもそれを乗り越える力が人間にはある。池田は、そうし

⁷ ラリー・ヒックマン、ジム・ガリソン、池田大作『人間教育への新しき潮流：デュイと創価教育』第三文明社、80頁

⁸ 池田大作(1993)「新しき統合原理を求めて」(池田大作(1996)『海外諸大学講演集 21世紀文明と大乘仏教』聖教新聞社)

⁹ 英語訳では、“the radical rationalist approach”(急進合理主義的アプローチ)となっている。

¹⁰ ヴィクトル・A・サドーヴニチイ、池田大作『新しき人類を 新しき世界を』潮出版社、2002年、93-94頁

た一人ひとりの可能性を信じ、その可能性を開花させることを第一義としました。彼の思想が、「人間主義」といわれる理由の一つはそこにあるのでしょうか。

もちろん、自身の可能性を開花させることは、容易なことではありません。池田は、創価大学第4回入学式で、「逆境への挑戦をとおして開かれた、ありとあらゆる生命の宝を磨きぬくにつれて、人間は初めて真の人間至高の道を歩みゆくことができる」と訴えました。そうした「汗と涙の結晶作業」のなかでこそ、各自の“創造的生命”は開花し、「創造的人間」へと成長することができるのです。

さらに池田は、同講演で、「人間が技術の開発、発展によって得てきた」“力”を学ぶだけではなく、「この“力”を使いこなし、人間の幸福のために価値判断していく」「知恵”をも持つべきだと呼びかけています。先に述べたように、学問が提供する理論、つまりここでいう“力”だけでは問題を解決できません。それは池田がいうように「部分観」に過ぎないからです。だとすれば、それを使いこなす人間の知恵がどうしても必要になります。

このことは、学問の役割を懐中電灯に例えるとわかりやすいかもしれません。もういちど、ゴールに向かって歩みを進める自分を想像してみてください。しかし、今度はゴールまでの道りをすべて明らかにしてくれる光はありません。あなたが持っているのは、暗闇の一部を照らす懐中電灯だけです。道が幾筋かに分かれた場所に来て、懐中電灯の光は、どちらの道がゴールにつながっているかを示してくれません。懐中電灯、すなわち理論は、すべてを明らかにする光を発することはないのです。しかし、かといって懐中電灯が要らない、ということはないでしょう。たとえ、すべてを照らし出してくれないとしても、暗闇の道を歩くのに、一本の懐中電灯は役に立つ道具ではないでしょうか。

そして、大事なことは、懐中電灯はそれをもって道を進もうとする人びとがいてはじめて活かされることです。理論も、それをういて具体的な問題を解決しようとする人間の知恵があってはじめて活かされるのです。

4. 創造的人間を育成する、学生中心の大学とは

最後に、これまでの考察をもとに、もう一度、池田が創価大学の学生に対し、「創造的人間たれ」「学生中心の大学」と訴えた意味を考えてみたいと思います。

私たちは大学の姿を考えると、気づかないうちに、このような枠組みで考えていないでしょうか？ すなわち、そこでは、大学にいる教員や研究者たちが作り上げた理論が、教育によって学生たちに伝えられ、学生たちはその「専門家」として、その理論を現実に応用していくこととなります。

理論

↓ 人間（専門家）

現実

しかし、この枠組み自体が、池田の構想とは異なっています。池田は、理論を万能と錯覚する「急進主義的アプローチ」を批判し、人間が「自らの行動によって運命を切り開いていく力」の発揮を出発点とするべきだ、と指摘しました。理論は、現実の一部分しか明らかにしてくれないからです。したがって、個々の具体的な問題を解決するのは、一人ひとりの人間の知恵です。だとすれば、人間と理論の位置は、この図のようになるのではないのでしょうか。

人間（知恵）
↓ 理論（知識）
現実

個々の問題の解決策を示すのは、あくまでも人間の知恵です。その人間は、理論を利用しますが、単純に理論に従うことはありません。このように、現実の一つひとつの問題を解決する知恵を発揮する人間こそ、池田のいう「創造的人間」に他ならないでしょう。

こうした視点に立った時、大学における教育が単に専門知識の伝達にとどまるのではないことは明らかです。現実のさまざまな問題を解決しようとする諸研究も、研究者による理論の体系化としてだけで完結することはありません。具体的な問題の解決は、具体的な現実のさまざまな局面で問題に対して自在に知恵を発揮する「創造的人間」の教育なしには成り立ち得ないからです。

ここに池田が、大学での教育を重視し、「大学の中心は学生」であることを強調した一つの理由があります。学生が、理論を教えられるだけの存在であれば、大学の中心は理論を作り出す教員・研究者です。しかし、学生が、現実の問題を解決する人間となるのが真に求められることであるならば、池田のいうとおり、大学の生命線は、学生一人ひとりの可能性を開いていくことであり、大学の中心は学生です。

池田は、学生たちに「創造的人間たれ」と呼び掛けた講演の中で、「戦争兵器がもつ平和への脅威はもちろん、進歩に対する誤った信仰が、人類の死への行進を後押ししている」と指摘しています。そして、こうした危機に対する「壮大な人類の戦いの一翼」を担うのが創価大学の使命であると述べています。本日の学術大会のテーマにある“持続可能な平和”の実現のための“人類文明の転換”は、まさに創価大学の開学の目的だったのです。その実現のために、池田が提唱したのが「創造的人間」の育成でした。

この理想の実現のために、創価大学は、「文化大恩の国」である韓国のみならずと共に歩んでいきたいと思えます。そして、今回の学術大会がその一歩となることを深く希望します。カムサハムニダ。